

巻頭言

Preface

岸井隆幸¹

By Takayuki KISHII

今年もこの巻頭言を「COVID-19」から始めなければならない。

一昨年末、中国から報告された新たなウィルスはあっという間に世界中に広がり、1年半の間に1億7千万人以上が感染、380万を超える命が失われた。まさにパンデミックであった。ただここへきてようやくワクチンが普及、徐々に「アフターコロナの時代」につながる「次の段階」が近づきつつある。

振り返れば「サラリーマンは気楽な稼業」と謳われたのは1962年、1964年の東京オリンピックは「戦後の次の段階」の象徴であった。内閣府の「国民生活に関する世論調査」で自分を「中流」だと答えた人は1960年代半ばまでに8割を越え、1970年以降は約9割となる。1970年代、淀橋浄水場が超高層ビル群に生まれ変わる時、新宿は「日本の中産階級の思考と行動と表現がすべてここに見られる」と表現された。こうした「中間層が厚い集団性」はわが国社会の特徴であり、ゼロ・リセットからのスタートがもたらした産物かもしれない。

しかし、今や多様性が新しい価値を生み出すという考え方が主流となり、同じ色で染まっていることが必ずしも好ましいことではないと思われ出している。そして、このコロナ禍によって首都圏では少なくとも30～40%、地方でも20%以上の方がリモートワークを経験した。危機に直面して社会は大きく動いたのである。今は首都圏の鉄道会社でも利用者数が元の水準に戻るとは考えておらず、リモートワークが定着するという見立てが多い。一方で、エッセンシャルワーカーと呼ばれる職種もあり、すべての人が新しい働き方に移行できるものではない。つまり、どういう職業・職種に従事しているかで、同じ「サラリーマン」でも働き方・通勤のスタイルが全く異なるという状況が生じた。人の行動を性・年齢・現在パターン・自動車保有の有無だけで推し量ることは困難な時代になってきている。

また、多くの方がリモートワークを経験して、もう満員電車には乗りたくない、と感じている。1980年ごろから人々が求める価値は「物の豊かさ」から「心の豊かさ」に傾きだし、今や60%を超える人々は「心の豊かさやゆとりに重きを置きたい」と考えている（上記内閣府調査）。いよいよこの価値観を実社会に映し出す時が訪れているのかもしれない。多様性が尊重される中で「心の豊かさ」を一義的に定義することは難しいが、少なくとも金銭やモノではない価値を自ら見出したい、そうした価値のために行動したい、という気持ちには通じるところがある。「次の段階」の「ニューノーマル」はその可能性を広げてくれるものでなければならない。

19世紀のパリでは、コレラから身を守るために清浄な空気が必要であると信じられていた。その結果、広幅員の緑豊かな街路空間が求められ、次の時代、パリは世界の人があこがれる街となった。今回は「密」を避けることが叫ばれ、リモートワークやオンライン会議が求められ、身の回りでも非接触の「ピッ」という電子音が日常的に聞こえるようになった。

「コロナの次の段階」は確実にこうした「ICT基盤」を前提にせざるを得ない。

だが、「ICT」は「多様性」や「心の豊かさ」に素直に結びつくのであろうか？

ネット利用データから嗜好を読み取って情報を提供する仕組みも多様性を前提にはしているが、基本的に「商い」の世界である。ユーチューブも個の発信を体現しているが、商業価値と結び付くと個人芸人の世界に過ぎない。

次の時代を「心豊かなもの」にするための「ニューノーマル」、金銭やモノではない「心の共振」をリアルに感じ取るために何が必要か、皆で考えたい。

¹一般財団法人計量計画研究所 代表理事 博士（工学）
※本文内のデータは執筆時点（2021年6月）